
B.O.W.黙示録

MA-125 Hunter ψ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B・O・W 黙示録

【Nコード】

N1775Q

【作者名】

MA-125 Hunter ψ

【あらすじ】

これはバイオが大好きな私がいかに夢を基に書いています。俗に言う夢日記のような物です。

でも、普通の夢というよりは…れっきとしたストーリーがあった夢だったのです。

そのストーリーを基本に、創造の産物を書き散らしていきます。

中傷、非難はお控えください。

P r o l o g u e ? (前書き)

私は……死んだ筈だった……

登校中、歩道に4メートルトラックが突っ込んできて……撥ねられた。

即死だというのはわかった。痛みもなにもない……

唯、人形のように飛ばされ、硬いアスファルトに叩きつけられ、そのまま意識は無くなった…。

そして……………

Prologue?

目が覚めたとき、そこは地獄だった……

ゾンビが至る所を徘徊し、死体を貪り食っている。

路上の車は炎上し、漏れ出したガソリンに引火して爆発している物さえあった。

見覚えのない街並み……英語で書かれた店の看板……

もう、此処が何処なのかはわかっていた。

“バイオハザード”の世界だという事が……

このままでは危険だ。

そう思って、私は起き上がり、怪我などはないかと自分の体を見た
……

「っ！！！！！」

私は…目に映った自分の姿に驚愕した……

P r o l o g u e ? (後書き)

文章の長さがバラバラですが多めに見てください。

感想などお待ちしております。

P r o l o g u e ? (前書き)

私は交通事故で死んだ筈だった……。
でも、気が付いたら…

Prologue?

何だこれは……？

人間の手じゃない……鋭利な鉤爪と緑色の鱗に覆われた皮膚……間違いない、「ハンター」だ。

あろう事か、私はB・O・Wのハンターになってしまっていたのだ……。

私は絶句した……。

何でハンターなの？何でクリーチャーなんか転生したんだ？？その時だった。

「あゝあゝあゝ……」

間近からゾンビの呻き声が聞こえる。

振り返るとそこには……

今にも自分に襲いかかろうとしているゾンビの顔があった。

「グギャオ!？」

驚きのあまり叫んで後ずさりする。

自分の声はすでに爬虫類のそれではなかった……。

「ウ……ウウ……ア……ア……ア……!!!」

ゾンビは躊躇なく迫ってくる。

怖い……怖い……コワイ……コワイ……

「ギャワオオオオオオ!!!!」

恐怖のあまり、何を思ったのか私はゾンビに飛び掛った。
グシャア、と嫌な感触が爪に食い込んだかと思えば、目の前にドサ
リ、とゾンビの首が落ちる。

”首狩り”だ……。私は無意識のうちにハンターの必殺技、”首狩
り”をしてしまったのだ。

「ゲッ……グウェエ……」

何ともいえない吐き気に襲われ、私はその場に嘔吐した。

いくらゾンビとはいえ、初めて”殺し”をしてしまったのだ。
罪悪感と嫌悪感に、私はしばらく苦しんでいた……。

P r o l o g u e ? (後書き)

主人公はハンターになっていた……
そして非現実的な出来事に混乱する。
疲れ果ててしまい、その場で休もうとするが、
予想外のことが起こった……

V a r i a n t 異形 (前書き)

ハンターとなってしまった主人公に新たな敵が襲い掛かる……
その正体は……

Variant（異形）

心身ともに疲労した私は、路地裏に入り、ビルの壁にもたれて座り込んだ。

何でこの世界に居て、何でB・O・W・なんかになってしまったのか……考えても混乱するだけだ。

今はひとまず休もう……そう思い、私は目を閉じた。

ズガガガガガガ！！！！

「ギャウツ！！？」

マシンガンらしき銃声に飛び起きる。

生存者だろうか？ だったら助けに行かないと！

走りかけて、私はすぐに引き返した……自分がハンターになっていたのを忘れていたのだ。

この姿だ。助けに行っても殺されるのは目に見えている。

「おい！そこに何か居るぞ！！！」

後ろの方で男性の声がした。

振り返ってみると……三人の人影……U・B・C・S……だ……

殺される！！

そう思った私はガラクタの陰に隠れて様子を伺った。

「生存者か？」

「いや、あの体形はハンターだ……」

「ハンターが投下されたなんて聞いてないぞ!？」

「大声を出すな! 気付かれるぞ!」

会話と共に足音が近付いてくる……

私は恐怖に身を縮めた。その時だ。

カコンッ!

「誰だ!?!」

不覚にも足が空き缶に当たってしまった。

気付かれてしまった……

「出て来い!?! さもないと撃つぞ!?!」

どっちにしても撃たれるだろうが……私は怯えつつもガラクタの影から這い出した。

V a r i a n t 異形 (後書き)

今の主人公にとっては人間が最大の敵です。
シヨットガンとかぶっ放されたら一溜りもありませんから…。

I r r e g u l a r（変則的）（前書き）

U・B・C・S. に見つかってしまった…。
このまま生きていられるだろうか？

I r r e g u l a r 変則的

カシヤッ!!

いつせいに銃口が向けられる。

「ギイイイイ……………」

私は涙を流して跪き、命乞いをした。と言っても、形だけになっているが……。

「おい…こいつ、命乞いしてるぜ?? 敵意もないみたいだな…」

「ハンターってこんなに知能高かったか？」

「いや……類人猿レベルだったはずだが…イレギュラーか？」

「だがB・O・Wである事に変わりはない。ひとまず眠らせよう。」

男の一人がまた違った形の銃をこちらに向ける。

「ギャッ!!」

「大丈夫だ…殺しはしない。」

バシユッ、と小さな音がしたかと思うと胸に針のような物が突き刺さる。

それと同時に意識が遠のいていく……。

『こち……チーム………。ラク……テイ……番地の……にてイレ
……ラーを……けん。……所へ……』

微かに彼らの声が聞こえる……。そのまま、誰かに担がれるような感
覚がして、ヘリの轟音が聞こえ始めた……。

やがて、私は気を失った。

I r r e g u l a r変則的 (後書き)

短くてすみません。

突発的に書いている物なので文章の長さには多少の変化があります。

感想、アドバイス等待ってます。

Genetic modification（遺伝子改造）（前書き）

麻醉銃を撃たれ、気を失った主人公。
連れてこられた場所は…

Genetic modification（遺伝子改造）

息苦しさに私は目を覚ました……。

薄緑色の液体に全身が浸かっている。息苦しいのはこれの所為か……
口には酸素ボンベのような物が取り付けられている。これでいっそう苦しさが増している。

苦しきのあまり、私は暴れた。

すると、徐々に液体が抜かれていく。

どうやらガラス製のカプセルに入れられていたようだ。

カプセルの外側から見える景色は機械的な部屋と白衣を着た人間たち……

此処はアンブレラの研究所なのか？

ゴン、ゴン。

「！！」

突然硝子を叩かれ、驚いて叩かれた方を見る。

そこには眼鏡を掛け、髭を生やした白髪の男性が立っていた。
そして、こう、問いかけられた。

「我々の言葉がわかるかね？」

私は頷いた。

そうしたら、今度はこんな事を言われた。

「お前の名前は何だ？」

名前？ わからない……人間だった頃の名前が思い出せない……

「な……ま……え……」

！！！！これには自分でも驚いた。さっきまで言葉を発する事など出来なかったのに、

今は喋る事が出来るのだ。

私の様子を見て、男は笑みを浮かべながら私に言う。

「驚いたかね？我々がお前を喋れるように遺伝子改造をしてやったのさ」

ガゴン！！

「ギャン！？」

遺伝子改造だって！？？あまりの衝撃的な発言に私は飛び上がったし
まい、

カプセルに盛大に頭をぶつけた。

男はそのまま話を続ける。

「その副作用として、お前の体色が変化してしまったがな……」

そう言われて始めて気付いた。今まで緑色をしていた鱗は美しい白
銀色に変わっていた。

これはちよつとだけ嬉しかった。

自分の皮膚を眺めていると、男が意地悪い顔をして答えようのない
質問をする。

「それで、お前の名前は何て言うんだい？」

私は戸惑う。自分の名前を覚えていないのだから……。考えた末、一番適切な答えを言った。

「ない。名前は…まだない…」

Genetic modification↳遺伝子改造↳(後書き)

研究所にて遺伝子を改造されてしまった主人公。
これからいったいどうなるのでしょうか？

アドバイスなどがありましたら感想欄に書き込んでください。

The new name and mission（新しい名前と使命）

遺伝子改造をされ、言葉を話すことが出来るようになった主人公に
またしても

予想外の出来事が起こる…

The new name and mission（新しい名前と使命）

ビーツ！ビーツ！ビーツ！

赤いライトの点滅と共に騒がしいサイレンの音が響く。

それと同時に数名のU・B・C・S. 隊員がカプセルを包囲し、銃口を向ける。

そしてカプセルが開いた。

運悪くガラス面にもたれかかっていた私は転がり落ちてしまった。

U・B・C・S. はまだこちらに銃口を向けている。

「止めて！撃たないで！殺さないで！」

私は叫んだ。

そしてさっきまで私に質問をしていた男性が笑いながらU・B・C・S. に

「大丈夫だ。こいつは暴走などしない。

銃を降ろしてやれ、逆に怯えて襲いかかって来るかも知れんぞ？」

その言葉でU・B・C・S. はやっと銃を降ろす。

「本当か？ジョゼフ・アストベリー博士」

ジョゼフ・アストベリー……どうやらこの髭を生やした白髪の男性の名前らしい。

そしてジョゼフ博士が

「アーサー・ラドフォード隊長、

こいつをU・B・C・S.のパートナーB・O・W.として、扱
ってくれんかね？」

「パートナー…B・O・W.？」

思わず私は聞き返した。

「パートナーB・O・W.計画。

知能を発達させた生物兵器をU・B・C・S.
と共に行動させ、より理想的な生物兵器を作る計画だ」

アーサー・ラドフォードと呼ばれた男が答える。

「言語を使うハンターか…いいパートナーになりそうだな。」

その言葉を聞いたジョゼフ博士は

「では決まりだな。早速だが、

こいつに名前をつけてやってくれんかね？アーサー・ラドフォー
ド隊長…」

The new name and mission〈新しい名前と使命〉(後

パートナーB・O・W・計画というものに強制参加(?)させられてしまった主人公。

この後はどうなってしまうのか…?

アドバイス、感想よろしくお願いします。

Silver Hunter（白銀の狩人）（前書き）

とうとう主人公に名前が与えられます。

そしてU・B・C・S.との関係はいかに…

Silver Hunter（白銀の狩人）

「名前か…確かに一々ハンターと呼ぶのは面倒だな…うーん……」

アーサーが私を見て考える……そして…

「“ランスロット” 今日からお前はランスロットだ」

ランスロット…悪くないな……人間のときは女だったけど、こういうのもありかも。

すると、横にいた隊員がからかうように言った。

「アーサー王伝説ですかあ？隊長お、裏切られちゃいますよお？」

「それはあくまでも物語だ。実際はどうだったか解らないんじゃないかないか？」

思いつきり突っ込んでみた。さっきまで笑っていた隊員が固まる。

「ハンターに突っ込まれるのもどうかと思うぞ？ウェイン…」

一番右側の隊員があきれながらウェインと呼ばれた隊員の肩を叩く。それを見てアーサーは笑う。

仲が良いんだなこの人たち……でもどこかで見たような？
その疑問はすぐに解けた。

「まさかこういう形でまたお前に逢うことになるとは思わなかった

がな…」

そう、あの路地裏であつた三人だつた。

私もこう答えた。

「俺もこういう形であんた達と会うなんて思つてなかつたよ。

まあ、今後ともよろしくな、アーサー隊長？」

アーサーは笑いながらこう言つた。

「しっかりパートナーとして働いてもらうぞ？ ランスロット！」

そしてそれに気合を入れて応じる…

「イエッサー！！隊長！」

とりあえず、彼らとは友好的にやっていけそうだ。

Silver Hunter（白銀の狩人）（後書き）

やっと名前決まりました、主人公。

この後はもう波乱万丈！だと思います…

感想等お願いします。

Nightmare again（悪夢再び）（前書き）

パートナー B・O・W. 計画に伴い、U・B・C・S. とランスロ
ットは

互いにかなり信頼できるまでになっていた。
そんな彼らを悪夢が再び襲う…

Nightmare again（悪夢再び）

U. B. C. S. 隊長、アーサー・ラドフォード。

U. B. C. S. 傭兵、ウェイン・パトリック。

U. B. C. S. 監視員、ロバート・ドゥーリー。

B. O. W. パートナー、ランスロット。

三人と一匹はカフェテリアでくつろいでいた。

ウェイン「ロバート、お前、キリマンジャロ？」

ロバート「ああ、ウェインはモカだったな。」

アーサー「俺はブルーマウンテンだ。ランスロットは何を頼んだ？」

ランスロット「…サルバドル。」

そんな意味も無い会話で和む三人と一匹。

アーサー「いやー、ランスロットがサルバドルとは意外だなあ」

ランスロット「強く主張する味は無く、

全体に甘く上品で柔らかな印象の味わいがたまらな

い…」

ウェイン「上品で柔らかか…ププツハンターにはあわねえなあ WW」

ランスロット「首狩るぞ」

……………。

ランスロット「気にするなって、ただのジョークだよ。」

ロバート「お前が言うとお洒落にならないから止めてくれ；」

アーサー「このまま何も起こらなければ……」

アーサーがそう言いかけた途端、呼び出しの放送がかかった。

『Sチーム、Dチーム、Fチーム、直ちにホールに集合せよ！繰り返す…』

ランスロット「その、何かが起こってしまったようだな……。」

互いに打ち解け、このまま事件が発生しないことを祈っていた彼等に、悪夢が襲い掛かる。

N i g h t m a r e a g a i n（悪夢再び）（後書き）

会話だけですみません。

この後、決死のサバイバルが始まることでしょう…

I s l a n d t r a g e d y 孤島の惨劇 (前書き)

三人の U・B・C・S・と一匹の B・O・W・のサバイバルが始まる…

今回はアーサー視点です。

Island tragedy 孤島の惨劇

俺達とはある孤島にいた。

ここは1998年にも、一度バイオハザードが発生している所だ。この島の地下に研究所があり、そこで再びバイオハザードが起きたと言うのだ。

ヘリから降りて、研究所へ向かう。

ロバート「前はエンデミック（地域流行）で済んだそうだが…」

アーサー「今回はそうは行かない感じだな？」

ランスロット「三つのチームが同時に、そして同じ場所に派遣される…大事おおいとじゃないのか？」

ウェイン「それに開発中のハンターまで脱走したって話だぞ…あーやだやだ…」

ランスロット（それは喧嘩を売ってるのか？ウェインよ…）

ウェイン「ラ、ランスロット…お前の事じゃないから！

凶暴で猿程度の知能のハンターだから！！そんな目で見ないでくれ！！」

アーサー「大声出すな、ウェイン！」

ランスロット「ウェイン、今の発言はハンターと言う種を侮辱してるぞ……」

ロバート「はあ…地上にゾンビどもがいなくて良かったな」

ロバートの言うとおりだ。もしゾンビがいたら今頃標的にされて悪戦苦闘してるだろう。

そんな会話をしながら、地下にある研究所のエレベーターに乗る。すると、ランスロットの顔付きが一気に険しくなった。

アーサー「どうした？ランスロット」

ランスロット「他愛もない会話が出来るのは此処までだ…嫌な予感がする……」

ウェイン「野生の感って奴か？」

ランスロット「……かもしれない。構えておけ！」

こんなに威圧的な態度のランスロットは始めて見た。

その理由はこの後すぐに解った。

エレベーターが止まった……。

ランスロット「まごまごしているとあっという間に首がなくなるぞ！」

ドアが開いた瞬間、

「ガギャギャアアアアアア……！！！！」

ハンターβ が物凄い勢いで突っ込んできた。

すかさずランスロットがタックルをかまし、ハンターβ を転倒させる。

そしてハンターβの首根っこを切り裂いた。噴き出す鮮血がランスロットを紅く染める。

「ギャ…ガ…ギャ…」

ハンターβは力尽きた。

ランスロット「同族を襲うとは…落ちたものだなあ？ β…」

確かに、今まで何度かハンターやその亜種と交戦したが…ランスロットが襲われる事など一度もなかった。

ロバート「おい、こいつをよく見ろ…」

ロバートが何かに気付いたらしい。

ランスロットも返り血を払い落としながら顔を顰めて頷く。

ウェイン「な…何だ？こいつは…全身出来物だらけじゃねえか…」

そう、ハンターβと思われた死体には全身が無数の赤い出来物で覆われていた。

ハンターβはせいぜい頭から肩にかけて出来物ができている程度だ。突然変異だろうか？

ランスロット「こいつの観察は後回しだ。大勢が大歓迎してくれているぞ？」

ランスロットの言葉で我に返った。ゾンビたちがぞろぞろとこちらに向かって来ている。

ランスロット「焦らずに攻撃するんだ！至近距離の奴は俺が始末する！！」

アーサー「よし、攻撃開始だ！！」

ランスロットの支持もあり、短時間でゾンビは一掃できた。
しかし、これは悪夢の序章に過ぎなかったのだ。

I s l a n d t r a g e d y 孤島の惨劇 (後書き)

初めてオリジナルのハンター亜種を出してしまいました；
オリジナルクリーチャーはまた出してく予定です。

感想などお待ちしております。

A b n o r m a l i t yゝ異常なものゝ(前書き)

研究所の奥へと進む一行……

彼等に襲い来る本当の悪夢……それは……

Abnormality 異常なもの

研究所の奥は静寂に包まれ、何ともいえない恐怖をあおる。

あちこちに血糊が飛び散り、倒れた椅子とテーブル。完全に破壊されていく物も幾つかある。

どうやら此処は食堂らしい。まわりには完全に動かないゾンビや、食いちぎられた研究員の骸、ハンターにやられたであろう首のない死体もあった。その光景はまさに地獄絵図とも言えた。

ウェイン「ううわ…グロっ」

ロバート「ひでえなこりゃ…」

アーサー「気を抜くなよ…？この先恐ろしい奴がいるかもしれん」

とりあえず、警戒しながら辺りを調べた。
特にこれといった物はないようだが…

ランスロット「おかしい……」

ランスロットが急に口を開いた。

？ いったい何がおかしいのだろうか。しばらくの間、沈黙が続く
……

ランスロット「お前等、まだ気付かないのか？」

アーサー「！！」

そうだ、確におかしい。これだけの死体と血痕があるのだ。ゾンビやハンターが何体か居ても不思議じゃない。

なのに、ここには何も居ないのだ……気配すら感じない……よく床を見ると、ハンターのものと思われる血の足跡が奥の厨房へと続いていた……

それかなり焦っていたらしい。コケた跡があった。しかも一体だけではない様だ。足跡がいくつも重なっている。

ロバート「おい、ランスロット、何をする気だ!？」

なんと、ランスロットが厨房の扉へと近付いていく。

ウェイン「お前、やっぱり俺達を裏切る……」

ランスロット「静かに!!」

そう言ってランスロットは扉をそっと開け、中を覗き込む。しばらくしてランスロットが俺達に手招きをする。

アーサー「なんだ? ランスロット、中はどうなってる?」

ランスロット「百聞は一見にしかずだ。お前達も見てみる……」

そう言われ、恐る恐る中を覗く……

厨房の調理台の下で何体かのハンターが身を寄せ合って怯えてる……それに、こっちに全く気付いていない……

統率役と思われるハンターβがしきりに厨房の奥の扉を警戒している。

その側近であろうハンターμが二体、ハンターβの傍に居る。

「ウオオオオオオオオ……」

厨房の奥からおどましい咆哮が聞こえてきた。
その途端、

「ギャース!!」

ハンターβが威嚇の声を発すると共に、調理台の下に居たハンター達が

すばやく出てきてハンターμの後ろで攻撃態勢に入る。

だが、調理台の下には一体のハンターがもう一体を抱き寄せるようにして、蹲って居る。

ズウン…ズウン…

巨大な何かの足音が響き、研究所全体が揺れる。

ガンツ!ゴンツ!ドガツ!ドゴオツ!

厨房の奥の扉がみるみる変形していく。

そして……

ガゴオオオオオン!!!!!!

扉が物凄い勢いで吹き飛ばされ、その周辺の壁は崩れかかっていた。

「ヴァァァァァグヴァァァゴォォォォ!!!!!!」

その奥の巨大な影が聞いた事もない恐ろしい咆哮をあげる。

「ギャオオツ！ギャオオツ！！」

ハンター達が一斉に巨大な影に襲い掛かる。だが……

「グエエエエエ！！」

二体のハンターμ がまるでボールの様に弾き飛ばされ、壁に叩きつけられて絶命した。

「ギャオオオオオオオ！！」

続けて他のハンター達が薙ぎ払われ、殺された。

「ギ…ギ……ギャアアア！！！！」

残されたハンターβが自暴自棄になったのか、その巨大な影に突っ込んでいった。

巨大な影はハンターβを鷲掴みにし、持ち上げる。

「ギャアツ！ギャアツ！ギャ……ゲ…グ……ギ……」

ハンターβが苦しそうにもがく。そして、

グジャアッ！！

あろうことか、ハンターβは勢いよく床に叩きつけられ、踏み潰された。

おびただしい量の血液が飛び散る。

L

ズウン！ズウン！

巨大な影が雄たけびをあげながらこちらに向かってくる。その姿はとんでもないものだった……

A b n o r m a l i t y、異常なもの、(後書き)

とうとう出会ってしまった……

最悪の事態に…最強の生物兵器に……

D e s t r o y e r（破壊者）（前書き）

アーサー達が見たもの…それは…とんでもないものだった……
それは彼等の脳裏に焼きついて、決して忘れる事は出来なかった…。

Destroyer（破壊者）

襲い掛かってきたハンター達を一瞬で殺害した謎の巨大な怪物……。その姿は…

“タイラントT-002型”と“ハンターα”を足して二で割った様な醜悪なものだった…

「ゴアッアッアッアッ！！！！」

“それ”は雄たけびを上げながらこっちへ向かって突進してきた。

ランスロット「散れ！！」

全員がバラバラの方向へ逃げた。

ドオオオオオオオン！！！！

その瞬間、目の前の扉が大破し、周辺の壁や物は粉々になり煙が舞い上がる。

ウェイン「ゲホッゲホッ……皆ア！聞こえるかぁ！？」

ロバート「ぐっ……くそお！煙で周りが良く見えない！！」

アーサー「ウェイン、ロバート、二人とも無事な…」

「グギュグギヤアアアアアアアア！！！！！！」

アーサー「!!!!!!」

目の前にはあの怪物が今にも肥大した爪を俺に振り下ろそうとしていた。

こんな所で死んじゃうのか!? くそっ!!

そう思い硬く目を閉じた……

ビシュアッ……

「ギィヤアアアアアアアアアアアアアアアア!!!!!!」

耳を劈くような怪物の悲鳴が上がる。

うつすらと目を開けてみるとそこにいたのは……

ランスロットだった……。その後方で怪物が顔を両手で覆っている。その隙を突いてランスロットが怪物の胸部を切り裂く。

ズシャアアッ

「グヴァァァァオァァァ……!!」

怪物の傷から青い血液が噴き出す。

ランスロット「厨房に向かって走れえ!!」

俺はウェインとロバートを連れ、厨房に向かって走った。

煙で周りが良く見えない……何度も立ち止まりそうになる。

その時、自分の横側を銀色の何かが通り過ぎ、目の前に現れた。

ランスロットだ。彼の美しい白銀の鱗が、ただ一つの道しるべにな

った。

後ろから怪物の呻き声が聞こえる。まだそう遠くない場所に居るようだ…

?? 「皆、こっちだ！早く来い！」

右側の方から誰のものでもない声がする。

ランスロットが右側へ動く。

俺達もその後を追った…突然、目の前が晴れた。どうやら此処は住居スペースのようだ。

ウェインもロバートも確認できた。

前方にはランスロットの背中が見える。

ガゴン…

後ろから扉が閉まる音がした。

?? 「皆さん、無事ですか？」

今度は女性の声がした。

俺は声の聞こえた方を見た……。

D e s t r o y e r（破壊者）（後書き）

タイラントT-002型”と“ハンターα”を足して二で割った様な姿

はどんな感じか…それは皆さんのご想像にお任せします。

D a y l i g h t u m b r e l l a d o e s n o t n e e d a n y

ランスロットの活躍により、九死に一生を得た彼等は
初めて研究所内の生存者を発見する…

Daylight umbrella does not need any

そこには、白衣を着た金髪の女性と、約60cmにも満たない小さなアルビノのハンターが立っていた。

??「U・B・C・S.の方ですね? 私はルチア・アバーナシーと申します。」

ルチア「それとこの子はバニラ。大人しく無害なので安心してください。」

バニラ「びゅーい…」

ルチア「それと、ライオネル、出てきなさい。」

ルチアと名乗る女性が見ている方向にはデスクの陰に隠れている緑の物体があった。

アーサー「俺達に会う前のランスロットみたいだな…」

ランスロット「俺ってお前等に捕まりそうになった時あんなんだったのか…?」

ルチア「誰もあんたを攻撃しないわよ。それにあんたがここに入れたんじゃない…」

ライオネル「わかったよ…」

すると、ライオネルと呼ばれた物体が出てくる。

それは数年前のB・O・W資料に載っていたハンターaだった。ハンターは今でこそは飛び出た両眼・引っ込んだ鼻等頭部の造形・大型の鱗に覆われた全身まで見事に吹っ切れた爬虫類然とした姿だが、

一昔前は、今ほど技術が発展していなかったのもあるのか、体色こそ緑なものの人間のイメージを残した突き出た鼻と

逞しい手足に血管が浮き出た皮膚の造形、小さな鱗は背部を中心に覆っているという

まさに人間と何物かとの融合した生物兵器だったのだ。

ライオネル「U・B・C・Sさんよお、そんなに俺の姿が珍しいか？」

ウェイン「あ、いやあ…資料でしか見たことない姿だったからなあ」

ルチア「そうよね。ライオネルが造り出されてから

もう五年も月日が経っているんだから…この型はもう、彼以外存在しないと思うわ」

アーサー「それにしても驚いた…人話を話すハンターがランスロット以外にも居たとは…」

ルチア「ランスロット？」

アーサー「この白銀のハンターさ。」

ランスロット「あ、始めまして…ランスロットです。」

アーサー「自己紹介する。U・B・C・S隊長のアーサー・ラドフォードだ」

ウェイン「U・B・C・S. 傭兵、ウェイン・パトリック。」

ロバート「U・B・C・S. 監視員、ロバート・ドゥーリー…」

ライオネル「おっと、俺だけ自己紹介してなかったな。」

俺はライオネル。1998年生まれのハンターαだ。」

一通り、互いの自己紹介は終わった。

だが、二つ疑問があった。

一つ目はライオネルについてだ。

なぜ旧型のハンターαがここまでの知能を持つ事が出来たのか。

二つ目はバナラとか言う、ちっこいハンターのことだ。

一つ目の疑問を問おうとした時、ライオネルが口を開いた…。

D a y l i g h t u m b r e l l a d o e s n o t n e e d a n y

やっと生存者を出せた…

それとハンターだけだ O r z

L i f e t h r e a t e n i n g生命の脅威(前書き)

研究所に居た生存者、ルチア・アバーナシー。

彼女が抱いている愛玩動物の様なアルビノハンター、バニラ。

そして、1998年代に造られた言葉を話すハンターα、ライオネル。

彼女達の秘密が少しずつ、明かされていく…

Life threatening 生命の脅威

ライオネル「U・B・C・S.の隊長さん、

俺が何でこんなにも流暢に話せるのか

疑問に思ってるだろう？教えてやるよ。“進化”だ。」

アーサー「進化だと!？」

ライオネル「そうさ、猿が人間に進化し、

言葉や道具を使えるようになったみたいにな…」

ライオネル「1998年にここでバイオハザードが発生した時にな…」

開発中だった俺は連中の隙を見て脱走した。

殺されるのが嫌だったからな……仲間は皆人間達を襲

って、

返り討ちになった。そんな中、俺は研究所から脱出し

て近くの森に身を潜めた…

野性の中で暮らしていく内に、俺は道具を使う事を覚

えた…。

爪で切り裂く事も、牙で噛み砕く事も出来ない木の実
を、石を使って割った。

それから、寒さから身を守る為に、火を使う事も覚え
た。

そうやって暮らしていると、不思議と自分の住処すみかが欲し
くなってなあ…

倒れた木で丸太を作って、それを蔓で固定して、小さ
な丸太小屋を建てた…

だが、小屋を造ったのが失敗だった。」

ロバート「すげえ……でも、なんで小屋を造ったのが失敗なんだ？」

ライオネル「研究所の奴等に見つかったんだ。ここは無人島、人なんて居ない。

なのに森の中にポツンと丸太小屋があるのはおかしい
と思ったんだろう……

それから俺は捕まった……。

そして、言葉というものを教えられたんだ。

で、現在に至るってわけさ……

これで俺の全ては話した。どうだ？他になんか質問はあるか？」

ウェイン「質問じゃあないけど、随分と短時間でよくそこまでの知識を得られたなあ」

ルチア「ハンターは人間にT－ウイルスを投与して遺伝子を変化させ、

そこに他の生物の遺伝子……主に爬虫類のDNAを組み合わせ

て
生み出されたB・O・Wよ。

ベースである人間の記憶が甦ったという可能性もあるわね。

」

ランスロット「遺伝的に操作され、過去の知能や知識は失われるが、
何らかのきっかけがその失われた知識を呼び戻した
んだろうな……」

ライオネル「たぶん、ランスロットが言うみたいにな

その人間の時の知能や知識が先祖帰りしちまったのか
もな。」

ライオネルの過去が明かされた。

ルチア「そちらの白銀のハンター…ランスロット君の事が気になるわ…」

ランスロット「話せば長くなる。ここも絶対安全というわけじゃない。

無事救助が終わってからゆっくり、

U・B・C・S・達にも改めて話そうと思っている。

」

ルチア「そう…じゃあ、私のことを話すわ……。」

ルチアはそういうと、大きく深呼吸して、話し始めた…。

L i f e t h r e a t e n i n g生命の脅威(後書き)

ユニークアクセス500突破&今現在獣の数字666!!

こんな駄文、読んでくださってありがとうございます!

長さも更新も不定期になると思いますが、早めに書いていこうと思います!

A n t i - U m b r e l l a o r g a n i z a t i o n（反アンブレラ組織）

研究所の住居スペースで出会った生存者、ルチア・アバーナシー。
彼女の正体が今、明かされる。

ルチア「私は反アンブレラ組織の一員よ…」

アーサー達は硬直した。

そんな中、ランスロットは妙に落ち着いた口調で話し出した。

ランスロット「ほう…ウィルス漏洩事件に深い関わりがあるな？ ルチアさん…」

ルチア「ふふ…さすがランスロット君。頭の回転が速いわね。

でも、犯人は私じゃない。犯人は…私の父さんよ…。

父さんは…ミハイル・アバーナシーは、

身分を隠してアンブレラ内部に潜入した。

私は、アンブレラの裏の顔を知りたくて、父さんと一緒に

来たの。

父さんは、この研究所の一切の研究を消そうとしたわ。で

も…」

アーサー「アンブレラの人間に見つかった…」

ルチア「そして死ぬ前に…

こここの最重要機密実験室のB・O・W。 “ハデス-T型”
を目覚めさせた…」

ウェイン「ハ…ハデス!？」

ロバート「恐らく、先ほどの異様な化け物だろう…」

ルチア「ハデス―T型はこの研究員が

タイラントの圧倒的な戦闘能力と生命力：高い知能。

それと：ハンターの強靱で屈強な肉体と敏捷性と跳躍力を兼ね備えた生物兵器を造ろうとした結果に出来た試作品なのよ。」

アーサー「試作品か：」

ルチア「そう。知能以外の条件全てが揃った試作品：

それに、奴の血液は度重なる実験でもう、ウイルスそのものよ：」

ライオネル「まあ、別な意味での究極生物兵器だな」

ルチア「対B・O・W・兵器が一切効かないハデスをどうやったら倒せるか：

それで生まれたのがこの“バニラ”なのよ。」

バニラ「ピュロロロ：」

ウェイン「こんなちんくりんがあのだカブツを！？」

ルチア「私はアンブレラ製のワクチンを基に

対T―ウイルス用の細胞と抗体を作り、敵の対ウイルス装備や防護策への

対抗兵器と言うコンセプトに見合うハンターをモデルにそれでバニラを造ったの。」

ランスロット「と言う事は：T―ウイルスを投与されて造られた

クリーチャーはバニラの攻撃で体内のT―ウイルス

が死滅し…

即死すると言う事だろう？」

ルチア「その通りよ…ただし、小柄で攻撃力が低いのが玉に傷ね。」

『ザー… ザー… Sチーム！ ザー…応答せよ！ 繰り返 ザー…す！…』

アーサーの持っていた無線機が鳴り出す。

『得体の ザー… 知れない怪物 ザー… D・Fチームが ザー… 遭遇し ザー…』

ルチア「…まさか…ハデスが！？」

『このままではザー… 全滅 ザー… うっ…ギャアアアアアアアアアアア！…！』

……………。

ズウン…ズウン…

全員に緊張が走る…

Anti-Umbrella organization 反アンブレラ組織

来るゝ♪きつと来るゝ♪きつと来るゝ♪ (ハデスが)

D i v i n e o f t h e H a d e s（冥界の神）（前書き）

突如無線機が鳴り出す。

同時にこの島へ派遣されたD・Fチームからだった。

『得体の知れない怪物が襲ってきた』と…。

その場に居た全員が息を呑む…

足音は次第に大きくなる…

奴はすぐそこに居る……

Divine of the Hades 冥界の神

ランスロット「無線の音が大きかった……この近辺で戦っていたんだな……」

ズウン…ズウン…

足音が近付いてくる…

ウェイン「今度こそ決着をつけねーとな！」

ルチア「こっちに来るわ!!」

ロバート「ここに入られたら袋の鼠だ! 戦闘に入るぞ！」

アーサー「それしか方法はない様だな…くそっ!!」

ライオネル「俺も参加するぜ。戦える奴は多い方がいい！」

バニラ「ピュイイイ!!」

ルチア「バニラ、あなたはまだ行っちゃ駄目！」

ランスロット「ルチアさんはバニラと一緒にとりあえずここで待機だ！」

俺達がハデスの注意をひきつける!! その隙にヘリポートへ!!」

ルチア「わ…わかったわ……気をつけて！」

ズウン！ズウン！

アーサー「奴はすぐそこだ！俺が合図を出したらここから出て奴と戦うぞ！！」

ウェイン「イエッサー！！」

ロバート「了解！！」

ライオネル「OK！！」

ランスロット「承知！」

アーサー「1：2：」

アーサー「GO！！」

ボタン！！

ハデス「ゲアアアアアアアアオオオオオオオオオオ！！！！！！」

ハデスは雄たけびを上げ、アーサーたちに向かってくる！

アーサーたちは銃を乱射するが全く聞いていない！！

ランスロットとライオネルは通路の両端に待機し、隙を見て

ランスロットが先に飛び出し、頭部めがけて鉤爪を振り下ろす。

ハデスはランスロットの攻撃をかわす。だが、それは計画通りだった。

すかさずライオネルが飛び掛り、不意をついてハデスの両目を攻撃する。

ランスロット「ハデスがアーサー達に気を取られている間に

俺とライオネルがとっさにたてた計画だ…上手くはめられて良かった。」

アーサー「ヘリポートへ行こう。ルチアたちが待つて居るはずだ。」

俺達はその場を後にした…。

途中、あの全身赤い出来物だらけのハンターが襲ってきたが、難なく倒せた。

ランスロット「おい、アーサー。」

アーサー「なんだ？ランスロット」

ランスロット「あの変異したハンターの

サンプルを取っておいた方がいい…」

ライオネル「俺もその意見に賛成だ。

ルチアに見せたら何か解るかも知れない」

ウェイン「でもどうやってあんな凶暴な奴から

サンプルを取るんだ？死体じゃ劣化しちゃって駄目なんだろう？」

ロバート「……麻酔か？」

アーサー「それしかないな…」

ウェイン「途中で目え覚ましたらどうするんだよ！？」

ライオネル「俺達が近くに居る。目覚めたら気絶させるから」

ランスロット「ドライアイス使えば？」

ライオネル「……あつ」

アーサー・ロバート・ウェイン・「その手があったか！」

ハンターは周囲の気温が一定以下になると

活動を停止するという爬虫類的性質も持っている。

話し合いの結果、麻醉銃で眠らせ、その後、ドライアイスを使って冬眠状態にさせ、アンブレラに送ると言う結論が出た。

「ギョオオオアアアアア！！」

噂をすれば何とやらで、早速本人のお出ました。

ランスロットが奴の注意を惹き、上手くしとめることが出来た。

ライオネルが変異したハンターを担いでヘリポートへと向かう。

そして、ヘリポートへと出た。

そこにはもうヘリが待機していて、ルチアがバニラを抱きながら手を振っている。

ルチア「早く来てー！！研究所の起爆スイッチが今、稼働したの！！」

アーサー「ライオネル、獲物を持ってるお前が最初に乗れ！」

ライオネル「わかった！」

ルチアとライオネルがヘリに乗り込もうとした時……

ズシャアアッ

後ろから鮮血がシャワーのように降り注いだ……
振り返るとそこには……

D i v i n e o f t h e H a d e s（冥界の神）（後書き）

物語がクライマックスです。

ほぼバイオ1みたいなラストになるかもです…

K y a n i t e A n i m o s i t y 憎悪の藍晶石 (前書き)

やっと脱出できる…そう安著した時だった…

後ろから鮮血が降り注いだ…

振り返ると、斃^{たおした}したはずの…ハデスが居た…

まるで我々を嘲笑うかのように…

その爪にロバートを串刺しにして…

Kyanite Animosity(憎悪の藍晶石)

アーサー・ウェイン「ロバート……!!」

ロバートの息はもう無かった…即死だ…
俺達は恐怖に震え上がった……

やっと苦勞して倒したはずの生物兵器が…まだ生きていたのだ…
今度こそ終わりだ……物凄い絶望感に襲われる…
ハデスは唸り声を上げながら俺達に近付いてくる…

ハデス「ウオオオオオオオオオオ!!!!」

もう全てを諦めた……

ああ、無念だ…やっとここまで来たのに…
俺はここで死んでしまうのか…

ゆらり…と、目の前に白銀の鱗が映る。

ランスロットの鱗だ。

ランスロット「ロバートを…殺したな…」

「よくも…仲間を…殺したな……」

「友を……親友を…殺したな……」

「異形の存在である俺を……兵器としてではなく……“ヒト”として
認めてくれた……」

「かけがえのないものを……殺したなあ……!!!!」

ランスロットの口から途切れ途切れに出てくる言葉は…悲しみと怒りに満ちていた…

家族を殺された人の様に…激しい憎悪を見せていた…

そして、泣いていた…

彼のカヤナイトの様に蒼い瞳から…とめどなく涙が溢れている…

爬虫類のような目を持つハンターである彼の目は…

紛れもない…“人間の眼”をしていた…

アーサー「ラン…スロット…」

ランスロット「お前だけは…絶対に…」

“ ユル サ ナ イ ”

まるで地の底から叫ぶ怨念の様な怒りと悲しみ…そして憎悪に満ちた声でそう呟くと…

彼はハデスに飛び掛った…

ランスロットはハデスの顔面を何度も切り裂き、噛み付き、強靱な足で蹴り飛ばす…

ハデスが咆哮をあげようと口を開いた…その瞬間、

ランスロットがハデスの咽喉下のどもとに渾身の蹴りを放った…

ハデスの咽喉にランスロットの足の鉤爪が突き刺さる…

ランスロットはハデスに刺さった爪を激しく動かし、一気に引き抜いた。

ランスロットの足には…“ハデスの声帯”が絡み付いていた。

彼は叫ぶ事すら許さなかった…

ランスロットはハデスの声帯を思い切り踏み潰すと、再生したばかりのハデスの心臓に爪をたてる。

そして心臓と一緒に露出している大動脈を引き千切る。

青い血液が噴水のように噴き出す。ランスロットは血塗れのまま、続いて上大静脈と下大静脈を同時に切り裂いた。

ハデスは苦痛の表情を浮かべ仰向けに倒れこむ…

荒々しい呼吸音が聞こえる。ハデスはまだ生きているのだ……

ハデスの血で青く染まったランスロットは狂気の笑みを浮かべ、こう言い放った。

ランスロット「俺の憎しみが晴れるまで…死なせはしない…

地獄の苦しみを…味あわせてやる！……お前の名に

合った…

極上の苦しみを与えてやる

「！！」

Kyanite Animosity 憎悪の藍晶石 (後書き)

ランスロットの怒りが爆発した。

それは彼の理性を壊し、内に秘めた狂気を奮い立たせる…

Knight of the variants（異形の騎士）（前書き）

怒り狂ったランスロットは驚異的なスピードとパワーでハデスを攻撃した。

だが、彼はなかなか止めを刺そうとしない。

ランスロットは瀕死のハデスをなお痛めつけ、ズタズタに切り裂いて弄んでいた…

Knight of the variants 異形の騎士

ランスロットは高く掲げた両腕を勢いよく振り下ろす。

その鋭利な爪はハデスの肺を直撃した……

ランスロット「どうだ？ 苦しいだろう？ ハデス……」

ランスロットは爪を引き抜いてハデスの心臓をゆつくりと抉り出した……

そして、一気に八つ裂きにした……

あまりにも猟奇的な行動に、俺は吐き気を感じた……

ランスロット「これだけ苦しみを与えたんだ……俺は満足だ……」

そう言うときまでハデスに馬乗りになっていたランスロットはハデスから降りると、

ランスロット「敵はとったぜ……ロバート……」

その声はいつもの穏やかなランスロットの声だった……

彼は近くに有った貯水タンクに穴を開け、青い血液を洗い流す……

アーサー「ランスロット……」

ランスロット「もう時間がない……行こう。」

俺とウェインはランスロットとヘリに乗った。

ルチアとライオネルが心配そうにこちらを見ていた。

ランスロット「全てが終わったら、詳しく話すよ…」

そして、ヘリは離陸し、孤島が小さくなっていく。

ランスロット「ロバート…どうか安らかに…」

ランスロットがそう呟くと同時に島は爆発した。

イレギュラーハンターはアンブレラに送られ、俺達は名もなき町に降りた。

ルチアとバニラ、ライオネルにウェインも一緒だ。

勿論ランスロットも。

俺とウェインはU・B・C・S・を抜けた…。

もう、後戻りは出来ない。

Knight of the variants（異形の騎士）（後書き）

物語はひとまず終わります。

ですが、彼等のその後を、少しだけ、エピローグで紹介します。

ちなみに、カヤナイト（藍晶石）は宝石の名前です。

The sun benefits 太陽の恩恵 (前書き)

あの忌々しい事件から数ヶ月がたった…。

彼等が訪れた町はあまりにも人気がなかった…。

ここにもゾンビが現れたらしく、

人々はショッピングモールの中へ逃げ込んでいた。

ゾンビはそれを追ってショッピングモールの前に大量に居た。

彼等はゾンビを全て退治し、町の住民を救出した。

その後、三人と三匹は町のドラッグストアの地下に

アンブレラの研究所があるのを発見したが、そこはもう、

バイオハザードが発生し、既に壊滅状態だった。

研究所の中は死体しかない。

彼等はそれを全て片付け、残った機材などを利用し、

反アンブレラを誓い、その対抗手段として製薬会社、

“Kindness of the Sun”

を創設した…。

The sun benefits 太陽の恩恵

ここはラクーンシティから北東にある隣町、アスクレーシティ。

あのラクーンシティ壊滅事件から数年たった後でも人食い事件が発生し、

人々は怯えながら暮らしていた。

そんな中、突如町にゾンビが現れ、シティ全体がパニックに陥った。誰もが「もう終わりだ…」そう思ったとき、救世主が現れた。

アーサー、ウェイン、ルチア、ライオネル、ランスロット、バニラの三人と三匹だった。

彼らの活躍により、アスクレーシティは平穏を取り戻した。

それから数年後…

元々とある会社の幹部社員だったウェインは会社の運営に力を入れ、現在、「Kindness of the Sun」の社長である。

ルチアはウェインの許で研究員、また、開発者として人々の為に働いている。

アーサーも今までの経験から、ルチアの助手として活躍し、今では彼女のよき夫だ。

バニラはすっかり「Kindness of the Sun」のマスコットとして定着し、いまやグッズまで販売されている。

ライオネルはアンブレラの実験被害者としての苦悩に満ちた生活の

日々

を記述した自叙伝、“光が遮断された世界”を出版し、世界中を反響させた。

ランスロットは現在、ライオネルと共に暮らし、アーサー夫妻やウエインとも頻繁に交流し、自身の醜い姿に屈することなく汚染地域に自ら赴き、苦しむ人々に救済の手を差し伸べた…。

そしていつしか彼は厄災から人々を救った英雄と讃えられ、アスクレーシティ中心の市立公園に銅像が建てられた。彼の像の台座にはこう刻まれていた。

“災害から多くの命を救った白金の鱗の鎧を纏いし異形の騎士、ランスロット”

その像の手には医の象徴、アスクレピオスの杖が握られている。ランスロットの銅像は天を見上げ、優しいまなざしで虚無を見つめて、

アスクレピオスの杖にもたれかかっている姿が彫られている。それは、当時の彼が人間であった頃の記憶を思い出しているとも、人々に恵みを与える太陽に、感謝しているとも言われている。

The sun benefits 太陽の恩恵 (後書き)

研究所脱出から数年後の出来事です。

この後は汚染地域を巡った

ランスロットのエピソードを書いていくつもりです。

The silver hunter became the Knight

祝ユニーク1000突破&PV10000突破！

人間からハンターに転生した主人公、「ランスロット」の
その後の活動。

久々に主人公視点のストーリー。

The silver hunter became the Knight

俺は今、“暴動”が発生したとニュースで話題になったとある街に
来ている。

ここでは最近、猟奇事件、化け物の目撃情報も多い…
もう検討はついている。アンブレラの仕業だ。

静か過ぎる市街地…荒れ果てた路上…間違いない…もう奴らが犇
いている…

「キャアアアアアア!」

路地裏から悲鳴が響く。

俺は悲鳴の聞こえた方向へ走る。
そこは行き止まり。

一人の女性が三体ほどのゾンビに襲われている。
俺は迷わず中央のゾンビの首を狩り、他の二体の頭部を容赦なく切
り裂いた。

「いや、来ないで、化け物!」

女性は怯えた目で俺を見つめ、その場にあったガラクタを投げつけ
てくる。

俺は耐える。彼女が周辺のガラクタを全て投げ終わるまで…

ランスロット「気は済んだか? お嬢さん…」

優しく問いかける。

「ひい! 化け物が喋った…私を騙して食べる気ね!」

だが女性はまた物を投げつけようとする。が、彼女の近くにはもう何もない。

「いや…いや…死にたくない…」

さっきの威勢はどこへ行ったやら…

女性は今、頭を抱えてその場にしゃがみこんでいる。

ランスロット「はあ…誰があんたを殺すって言ったよ…」

「え…？私、食べられるんじゃない…」

ランスロット「俺はあんたを食わねえよ。

第一食う気だったら真っ先にあんたを殺してるはず
だろ？」

「……………」

ランスロット「やれやれ…助けに来てやったのになんて仕打ちだ…」

「あなた、一体何者なの？」

ランスロット「人間の心を持った怪物…かな…」

とりあえず、ここは危険だ。ついて来い。」

「え…う…うん…」

俺は彼女を連れて安全な所を探した。
行く先々で、大勢の生存者に会った。

彼女が居たお陰で最初のような事にはならなかったがな。

俺はとりあえずこの街のショッピングモールに生存者を連れ、アーサーたちに連絡を取った。

すぐに迎えのトラックを用意してくれたので、救出はスムーズだった。

ただ、厄介だったのは感染者への警告とゾンビ化した後の始末だ。まあ、感染した者はワクチンを投与しなければいずれゾンビになる。それを証明してくれるのはゾンビ化する感染者だ。

迎えが来るまでの間、

俺は重度の感染者を隔離し、生存者達が見守る中、感染者はゾンビ化した。

その光景を見せた後で俺は生存者にこういった。

ランスロット「ゾンビに噛まれた奴は個人差があるとはいえ、ワクチンを投与しなければこうなる。それに、感染度合いでは、投与しても効果が現れずゾンビ化する事もある。」

ランスロット「一気に三箇所以上噛まれた奴は残念だがもう救う手だてはない…」

ただし、死に方は二つだ。人間として死ぬか、ゾンビとして死ぬか…」

そう警告した途端、重傷を負った生存者たちは、もし、ゾンビ化しそうになったら、

我々がゾンビ化する前にお前が首をはねて人間として死なせてくれと…

俺は言うとおりにしてやった。

俺は彼等の首をはねる前に、必ず涙を流して、こう呟いた。

ランスロット「お前は絶対天に召される…どうか安らかに眠ってくれ…」

最初は俺を化け物扱いしていた生存者達は、迎えが来る頃には俺を

“白金の騎士”と呼んだ。

最初にそう呼んだのは、あの時、路地裏で助けた女性だった。

「彼方は私達を化け物から救ってくれた…白金の騎士様です…」

この事件以来、俺が地獄と化した街を訪れる度、生存者達は涙を流して歓喜した。

“白金の騎士がやってきた！”と……

The silver hunter became the Knight

ランスロットは今でも救助活動を行っています。
アンブレラの脅威から人々を救うために：

感想などお願いします。

I was human. It means that it is the

私がこの世界に転生してから、どれほどの月日経っただろうか…
最初の姿は初代バイオハザードの飼育係の日誌に書かれていた
“皮をひんむいたゴリラのような奴”としか言いようがなかった。
でも、時間が経つに連れて、使わない筋肉が衰えたのか、
今はより人に似たシルエットになった。

そしてここに来てから出会い、現在も共に暮らしている

アーサー・ラドフォード…

ウェイン・パトリック…

ルチア・アバーナシー…

バナラ…

ライオネル…

私は彼等に約束があった。

全ての事が終わったら、自分のことを改めて話すと…
私は全てを語った。

異世界の人間だと…

そして、“死んだ”という事を…

目が覚めた時にハンターになっていたという事…

この事を話したら、皆は信じられないといった顔をしていた。
そりゃあ、信じられないよね。

だって、この経験をした本人が信じられないんだから。

でも、それは紛れもない事実。

私の記憶に、この出来事がしっかりと、色濃く刻み込まれているのだから：

I was human. It means that it is the

今、私が暮らしているアスクレーシティには、

「Kindness of the Sun」（カインドネス オ
ブ ザ サン）という製薬会社がある。

アンブレラ倒産後に力を付けた製薬企業ウィルファーマ社
と肩を並べるほどの大企業だ。

社長はとある会社の幹部社員だった元U・B・C・S. 隊員だ。

気さくで関わりやすく、他社からはかなりの好印象である。

アーサーとルチアは現在、夫婦でこの会社に勤める幹部研究員だ。

今までの経験から、病原体からのワクチン開発や

いまだに治療法のない病気の特効薬開発を主にしている。

そしてこのカインドネス オブ ザ サン社は

アンブレラやアンブレラに敵対する謎の組織「H・C・F.」によ
って開発された

B・O・W. の生態や弱点などを研究し、今後のバイオテロ対策に
ついても力を入れているが、

同じく、ここで暮らしているハンターαのライオネルは、ラクーン
の二の舞に

なるのではないかとひやひやしている。

そんな彼と私もこのカインドネス オブ ザ サンのB・O・W.
研究科で働いている。

一般社員や研究員の中にはラクーン事件の実態を知らないものが多
い。

“ 過去から学ばない者は、過去を繰り返す。 ”

そういう輩がいつ出ても不思議ではないのだ。
だからこそ、私たちはここで働いている。

そのもしもが起こるのを防ぐ為に……

過去を知るものが過去を知らないものを学ばせる為に……

今日も、ライオネルと私、ランスロットはB・O・Wの知識を与えると共に、

裏切り者が出ないか、監視の目を光らせている。勿論、バナラも……

追記..

B・O・W 研究科のひとりの研究員から、

「ハンターの生態を詳しく知りたい」

と言われ、なにやら色々検査をされてしまった。

なんとも、その研究員が言うにはB・O・Wの中には繁殖能力を持つものも居るのだとか：

その可能性が高いとされるハンターについて調べたいが、

通常のハンターは非常に攻撃的な性質であり、かなり危険だという事で……

人間と同じ知能を持ち、おとなしい性質の私とライオネルに協力して欲しいとのことだった。

繁殖能力を持つB・O・Wにはライオネルも私も興味を持ったので、協力した。

驚いたのはその結果だった。

ライオネルは雄で、私が雌だということが判明した。

ライオネルは満更でもない様子だったが……

私は生前と同じ性別だったのには驚愕だった…。

その後、ライオネルが凄んできたので、思いつきはっ倒してやったが…

『ピピピ、ピピピ…』

私の持っている携帯端末に連絡が入る。

バイオテロ発生との連絡だった。

私はいつものように救命道具をリュックに入れて背負うと、その場を後にした。

この仕事で、何度か生命の危機に陥った事があるが、私はそんなものは恐れていない。

もし、命を落したとしても、人間として再び転生できるのかもしれない…。

だが、私は一度死んだんだ…。

だから…人の姿に戻らなくなっている。

たとえば化物の姿でも…人間だった頃の記憶と知識、知能が引き継がれただけで…

十分だ…。

唯一つ…失ったのは…

殺しに対する先入観だけだからさ……

E
N
D

I was human.

It means that it is the

Thank you for reading !

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1775q/>

B.O.W.黙示録

2011年1月28日22時01分発行